

## 「一人の若者が逃げる」

2022年06月22日

一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスに付いて来ていた。人々が捕らえようとすると、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。（マルコ福音書14章51節～52節）

主イエスは、ユダが引き連れて来た神殿の衛士たちに捕縛された。弟子たちは皆、捕らえられることを恐れ、逃げ去ってしまった。マルコ福音書は、その場にいた一人の若者の姿を記している。突然登場し、生々しい出来事を書いているので、マルコ福音書の著者ではないかと解釈する人もいる。彼は自分の体験から、読者に捕縛時のリアリティを伝えている。私は彼に興味を引かれ、想像逞しく、下記のような人物像を描いている。

最後の晩餐を行った二階の広間の所有者は、主イエスが神殿当局に命を狙われていることを知りながら、最後の晩餐の場と食事を提供していることから、主イエスに深い愛と尊敬を持っていたことは確かである。この若者は、広間の所有者の息子ではないか。高価な亜麻布をまとっていることから、裕福な家庭の若者であることが分かる。彼は、自分の親は危険を承知で、主イエスに篤い好意を寄せているが、そのイエスという方はどんな人なのかと関心を持った。彼は若者らしい好奇の目で、最後の晩餐、オリブ山の道行、そして、ゲツセマネの深刻な祈りと弟子たちの体たらくを、背後から見続けていた。眠りこけていた弟子たちは主イエスの祈りを知り得ない。興味津々と目を見開いていた若者が主イエスの祈りをしっかり、見聞きし、伝えたのである。弟子たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去ったが、彼は逃げ遅れ、捕まった。その時、亜麻布を脱ぎ捨て裸で、必死で逃げた。

使徒言行録では、聖霊降臨は「皆が同じ場所に集まっている」と書き始められているが、この場所は最後の晩餐が行われた二階の広間ではないかと、私は想像している。それは、使徒言行録12章の記述からの想像である。ペトロが捕縛され、鎖でつながれていたが、天使に導かれ、牢を出る。「ペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた（使徒言行録12：12）」と書かれている。ペトロは牢を出た後、マリアの家に行った。この家が、最後の晩餐と聖霊降臨があった場所で、最初の「エルサレム教会・家の教会」ではないか。二階の広間の所有者はマリアで、その息子がヨハネ・マルコである。彼が亜麻布を脱ぎ捨てて逃げた若者ではないか。

このヨハネ・マルコは、バルナバとサウロ（パウロ）が、第一回の宣教旅行に行った時、同行している。彼はアンテオキア教会において、信頼される人に成長していたということである。ところが、彼は宣教旅行の途中、エルサレムに帰ってしまった。宣教旅行がつかなくなったためか、母マリアが恋しくて、母の所に帰ったのか。彼は裕福な家庭の子で、マザコンではなかったかと思ったりもする。バルナバはパウロに第二宣教旅行に行こうと誘い、ヨハネ・マルコも連れて行こうと提案したが、パウロは途中で宣教旅行から離れるような人は連れて行けないと意見が対立し、激しく衝突した。そのため、パウロはシラスと第二宣教旅行に出かけることになった。

聖書の書き方は、福音の要件のみを書いて、その他は省略されているので、想像が駆り立てられる。その想像が広がりを持っていくのも、面白いのではないか。若者に関して、上記のような結びつきが想像される。あり得るのではないか。母親の関心が、息子に受け継がれ、主イエスを信じる人に成長し、初代教会で用いられたという話は、勇気を与えられる。宣教旅行の途中、脱落する弱さがあったということも、また、可愛いではないか。